発行／青森県立自然ふれあいセンター　〒038-1301 青森県青森市浪岡大字大釈迦字沢内沢 1-1
TEL 0172-62-4527　FAX 0172-62-8510　URL http://www.jomon.ne.jp/~bonjyu/　メールアドレス bonjyu@jomon.ne.jp

□ 行事レポート □ ●新春梵珠山登山　1月9日(日)

新年最初の恒例行事

準備を整え、新雪たっぷりの梵珠山へ出発！

モノクロの世界に彩を添える登山ウェア

ボランティアガイドの解説も楽しみの一つ

寺屋敷トイレの屋根にも雪がドッサリ

山頂到着♪ 梵珠七観音へ新年のご挨拶

●ハルニレ

齋藤 信夫（青森自然誌研究会）

ハルニレはあまり馴染みのない樹木かも知れない。氾濫原や平原、そして斜面の下の方や沢筋などの湿り気のある場所に生える。大きい個体は樹高が30m前後、幹の太さが100cm前後にもなる。ニレの仲間にはオヒョウニレ、アキニレなどもあるが、ニレといえばハルニレのことを指している場合が多いと言われている。ハルニレのハルは春のことで、春に花を咲かせるニレという意味だそうだ。そう考えればアキニレは秋に花を咲かせるから秋ニレだと納得できる。梵珠山でのハルニレは沢岸や比較的緩やかな広い尾根などに点在しているし、山頂周辺にも生えている。そんなこんなで梵珠山ではかなり広範囲に分布している樹木と言えそうだ。

植物に興味を抱き青森県内の山野を散策していた大学生の頃、ハルニレは氾濫原や湿性平原に生育するものとばかり思い込んでいた。だから、梵珠山の山頂から馬ノ神山や魔ノ岳方面へと北上する尾根筋にハルニレが点在することを知ったときはとても驚いた。たぶん、当時は植生に興味があったものだから、群落名にハルニレが登場するタイプの群落の資料のほとんどが、氾濫原や湿性平原からのものだったことも影響していたのだろう。

ところで、これまでも、ハルニレの花を見たいと思い続けていたが、なかなか花に会うことができないでいる。多くの場合、目の前にあらわれるハルニレはすでに花を終え、種子となっていたからだ。また、花を咲かせるハルニレは樹高もそれなりに高く、花をじっくり観察できるような位置に花をつけないのが普通だ。ハルニレの花は４～５月頃に葉が展開する前に咲く。だから、葉が出る前のハルニレの枝に、小さな小さな有色の繭玉のようなものを見ることができれば、それが花の塊なんだという具合に、春のハルニレを見ているが、やっと蕾ができはじめた時期だったりして、やはり花をじっくり観察できないまま今に至ってしまった。

ハルニレの種子の周りには長いハート形の翼があり、ハートのへこみに近い部分に種子が収められている。このように翼が付いた種子は翼果と呼ばれ、風にのって散布される。山頂付近のハルニレは尾根越えの風にのってどこまで運ばれていくのだろうか。ある本によると、ハルニレの種子は地面に落下した際、もしそこが明るい場所であれば２週間ほどで発芽するが、林内のような暗い場所であれば冬を越してから発芽するという。梵珠山に生えている大きめのハルニレのそれぞれが、遺伝的にどんな関係にあるのかを探るのも面白い気がする。

梵珠山山頂わきのハルニレ（2021年3月24日）

花芽が動き始めたハルニレ（2021年4月20日）

生物こよみ（昨年）　４月　☀☁☂☃：昨年の天気　℃：昨年の気温（月最高気温）　低：昨年の気温（月最低気温）

日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
曜	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金
観察できたもの	カタクリ・ヒオドシチョウ	ミズバショウ	マヒワ群れ	シジュウカラ・コガラ	アラゲヒョウタンボク	アオゲラ・アカゲラ	クロサンショウウオ産卵	エンレイソウ	カシラダカ・キジバト	イタチ	スギタニルリシジミ	エンレイソウ	オオバキスミレ	キセキレイ	キクザキイチゲ	クサギカメムシ	スミレサイシン・ウグイス	オオカメノキ・アナグマ	スコットカメムシ	シラネアオイ・トラツグミ	イタヤカエデ・カナヘビ	ナガハシスミレ・カモシカ	サンカヨウ・ヒョウノセンカタバミ	ムラサキヤシオ・サル	ツノハシバミ	エゾノリュウキンカ	ミヤマエンレイソウ	コヨウラクツツジ	ヤブサメ・キジバト	キツネ・キクガシラコウモリ
天	☀	☀	☀	☂	☀	☁	☀	☀	☃	☀	☀	☀	☁	☀	☀	☀	☂	☂	☀	☀	☀	☀	☀	☀	☀	☀	☀	☁	☁	☂
℃	13	13	19	11	10	10	13	7	3	9	13	19	17	10	11	19	14	14	13	18	13	15	19	18	12	10	15	18	16	9
低	1	0	2	5	0	-1	1	1	-1	-1	-1	-1	4	1	1	-1	6	7	6	1	0	0	1	2	2	0	-1	2	7	5

●カマキリ

市田 忠夫 （津軽昆虫同好会）

カマキリは完全な捕食性の昆虫で、昆虫界ではオオスズメバチと並ぶ最強の昆虫といえます。青森県には、オオカマキリ、ウスバカマキリ、コカマキリの３種が生息しています。最も普通なのはオオカマキリで、県内各地で普通に見られます。

ウスバカマキリは芝地に近いような、浅い植生のところに生息します。そうした環境は、近年では牧草地のような所でないとなかなかありませんので、観察するのも容易ではありません。一方では、県内で分布を広げている種もあります。県産種では最も小型のコカマキリです。温暖化による北上種と考えられ、対馬暖流に洗われる深浦町で2003年に最初に確認しました。近年では、北上が著しく、弘前市街地でも普通に見られるようになったとのことですが、黒石市では見たことが有りません。

コカマキリに続いて、北上が時間の問題と考えられる種として、オオカマキリに良く似た、チョウセンカマキリがあります。

秋田県や岩手県では、以前から棲息が確認されています。オオカマキリとの見分け方は、カマの付け根の部分が黄色いのがオオカマキリで、チョウセンカマキリはその黄色い斑点が有りません。

カマキリといえば、越冬する卵塊が積雪下になると、呼吸できなくなり卵が死んでしまうので、その年の最深積雪を予想し、必ず雪の上に露出する枝などに産卵するという話を聞いたことがあると思います。この俗説に疑念を持ったのは、私の大学の恩師、安藤喜一先生です。先生は退官後、カマキリの生態を研究し、2021年８月に「カマキリに学ぶ」という書籍を北隆館から刊行しました。安藤先生は、カマキリの卵が沢山産れている草藪などに、消雪後に行くと、草は雪の重みで倒れており、それらは全て100％近く孵化しました。実験的に、真冬に１か月間、網袋に重りを付けて水に沈めたものでも、９割以上正常に孵化し、２か月でも８割孵化し、「カマキリの雪予測」は似非科学であることが、証明されました。

ウスバカミキリ

コカマキリ

生物こよみ（昨年）　５月　☀☁☂：昨年の天気　℃：昨年の気温（月最高気温）　低：昨年の気温（月最低気温）

日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
曜	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月
観察できたもの	アナグマ	オオルリ	チゴユリ・センダイムシクイ	カモシカ・アオジ	カケス・ヤブサメ	ニリンソウ・ユキザサ	ツツドリ・アオバト	シマヘビ・ヒトリシズカ	カケス・ニリンソウ	トラツグミ・クルマバソウ	シロマダラ・オシドリ	キセキレイ・マイヅルソウ	エゾハルゼミ初鳴き・ヤマガラ	モズ・ホオジロ・アオジ	フデリンドウ・ウラジロヨウラク	エゾタンポポ	ユキザサ・ノジコ	クルマバナ	チゴユリ・カルガモ	トチ・タニウツギ	カワガラス・アナグマ	アオサギ・カケス・テン	ニリンソウ	シウリザクラ・ノダフジ	モリアオガエル卵塊	クマタカ・ウスバシロチョウ	オオルリ・ベニシジミ・ミズキ	ニホンカワトンボ・シオヤトンボ	ジムグリ・オオスズメバチ	カモシカ	アオイトトンボ・サカハチチョウ
天	☀	☂	☁	☀	☂	☀	☀	☀	☂	☁	☁	☀	☀	☀	☀	☂	☂	☀	☂	☀	☂	☂	☁	☁	☀	☀	☀	☀	☁	☂	☀
℃	15	10	10	19	16	22	26	21	19	11	15	17	21	20	26	23	19	21	18	23	16	16	19	18	19	19	18	21	21	16	16
低	6	5	5	4	7	7	7	7	6	8	6	8	8	9	7	11	13	11	12	11	13	13	12	13	11	8	8	11	11	11	7

●冬の樹木観察

乗田 利一（津軽植物の会）

今年の冬は雪が多かった。街中では渋滞で悩まされるが、野山ではスノーシューで自由自在に動き回れる。雪がなければ足を踏み入れるのがためらわれるような場所でも苦にならないし、低木類は雪の上にこれ見よがしに枝を出している。また、降雪のお陰で、高いところの枝を目の前に引き寄せて観察できる。

さて、冬の樹木観察と言っても、冬の木は花を咲かせているわけではないし、葉も落としてしまっている。ツルアジサイのように花殻を残しているものやカシワのように枯れた葉をつけているものもあるが、ほとんどは裸の木になっている。でも、裸だからこそ木の肌も枝ぶりもよく見える。そして、枝についている冬芽も見える。自分にとっての冬の樹木観察とは、この冬芽観察のことである。

冬芽は芽を覆う芽鱗をもつものが多い。ミズナラのように芽鱗を多数纏ったり、キタコブシのように芽鱗に毛を生やしたりしている寒がり屋の一方、サワグルミやリョウブのように早期に芽鱗を落としてしまうせっかち屋もあるし、ニガキやサンショウのように芽鱗を持たない強者もある。

冬芽の下には葉の落ちたあと（葉痕）がある。葉痕の中には水分や養分の通路の管の断面（維管束痕）が見える。維管束痕は三つのものが多く、オニグルミの葉痕は羊の顔に見えるという話はよく聞く。自分にはガマズミは子犬に、ケンポナシはいたずらっ子に見える。また、ツタやイヌエンジュ、クズは複雑な表情を見せる。

青森で最も寒い２月のブナの冬芽を解剖してみた。20 枚くらいの芽鱗に包まれて数枚の葉と枝があった。そして、芽の中の枝にはすでに芽ができていた。ヒトの受精卵が細胞分裂して最初にできるものは脳でも心臓でもなく生殖細胞だとテレビで見たことを思い出した。生物として次の世代に命を繋ぐことは一番大事なことなのだろう。

春になると冬芽観察は一段落するが、多くの木は夏頃までには冬芽をつける。樹木にとっては、春来たりなば冬遠からじ、か。

生物こよみ（昨年）　６月　☀☁☂：昨年の天気　℃：昨年の気温（月最高気温）　低：昨年の気温（月最低気温）

日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
曜	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水
観察できたもの	ハクビシン・アオダイショウ	キビタキ・シジュウカラ	サワフタギ・ギンリョウソウ	ジンヨウイチヤクソウ	ゴジュウカラ・シジュウカラ	オオトラフトンボ・キアゲハ	オゼイトンボ・ヒメクロサナエ	アサギマダラ・コケイラン	アオダイショウ	クマタカ・ヒメネズミ	カケス・フタリシズカ	オオルリ・キビタキ	ヤマドリ・アカゲラ	シジュウカラ	サカハチチョウ・ヤマガラ	アナグマ・キビタキ	クマタカ・ヤマナメクジ	サイハイラン・オニシモツケ	サル・ヤナギトラノオ	ヤマボウシ・カナヘビ	オオルリ・アナグマ	カケス	アカショウビン・アカゲラ	ホンドリス	ウラギンヒョウモン・ツリバナ	ノコギリクワガタ・ハクビシン	ツツドリ・アカアシクワガタ	コムラサキ・クジャクチョウ	アカショウビン・クマタカ	オニノヤガラ・エゾアジサイ
天	☀	☀	☀	☂	☀	☀	☀	☀	☀	☀	☀	☁	☀	☀	☁	☀	☀	☁	☀	☁	☂	☁	☂	☂	☀	☀	☀	☀	☁	☀
℃	20	24	24	19	25	26	24	23	24	28	30	23	26	28	21	22	22	22	21	20	20	22	19	23	24	26	27	25	22	28
低	6	11	10	10	9	12	12	12	14	12	14	15	17	15	15	16	15	14	15	14	14	14	16	14	13	12	14	16	16	16